

特許庁技術懇話会 常任委員 神谷 由紀

2014年の新春を迎えまして、謹んでお慶びを申し上げます。

今年が特技懇にとってどんな年か、皆様ご存じでしょうか？特技懇こと特許庁技術懇話会は、1934年に設立されました。したがって、今年は設立80周年という節目の年にあたります。80年と言えば平均的な日本人の一生涯にも相当するような長い年月、傘寿を迎えたおめでたい年となりました。

特技懇が生まれたのはどんな時代だったかと歴史を紐解けば、それは昭和9年、関東大震災後の復興・都市計画の一環として現・特許庁所在地に、懐かしい旧庁舎がちょうど完成した年でした。当時の特許庁は商工省「特許局」であり、界隈は東京市麹町区三年町と呼ばれていました。

同じ年に東京地下鉄が上野から新橋まで延伸開通しており、両駅から地上の鉄道に乗り換えて通勤することも可能になっていました。その頃まだ地下鉄のつながっていなかった渋谷駅では、飼い主を慕う忠犬との新聞報道で話題の秋田犬・ハチ公が自らの銅像と並んで春の除幕式を迎え、秋には東口に東横百貨店が開業しています。有楽町周辺でも東京宝塚劇場と日比谷映画劇場が相次いで開場するなど、東京の街が日に日に賑わうその一方、海の向こうの世界では、ヒトラーがドイツ総統に就任し、その後の激動の時代の予兆となりました。イタリアではサッカーのワールドカップ第2回大会が開催されています。当時の日本もFIFAの加盟国でしたが、本戦の舞台に立つのは第16回フランス大会まで長く待つことになりました。

野球界では、ベーブ・ルースが日米親善試合のためにアメリカ大リーグ選抜チームの一員として来日を果たし、高校野球で名を馳せた沢村栄治投手とのスター対決が実現しています。銀座では来日歓迎パレードが行われ、市民が押し寄せ熱狂したそうです。その際の日本チームの選手を主体に日本初の職業野球団である大日本東京野球倶楽部（現・読売ジャイアンツ）が結成されたことで、日本におけるプロ野球の歴史が始まったのもこの年です。もちろん国内でのテレビジョン放送はまだ実現していない時代です。当時の審査官の先輩方はどのようなお気持ちで庁舎の仕事机に向かわれ、特技懇の組織を結成したのでしょうか。

特技懇は、特許庁・技術系審査官の任意団体として、「会員相互の研さんならびに地位の向上をはかり、あわせて特許行政に寄与し科学技術の振興をはかること」を目的に活動を行っています。現在では主な事業として、会報であるこの「特技懇」誌を定期刊行することと、特別会員と正会員、知財関係者の親睦の場である懇親会を開催すること、そして各種勉強会・セミナーの開催等を行っております。これらの事業は、庁内審査各部から選任された常任委員と常任幹事の計13名により組織される常任委員会のもとで運営されています。このような特許庁内外への情報発信が、審査官及び審判官の技術的知識を高め、会員相互の研さんに資するようにと日々活動しているところです。

また、昨年度事業で作成しました国際審査官交流向け記念品「JPO TOKUGIKON」銘入りの文具2種は、おかげさまで大変ご好評を頂いております。既に第269号誌面にて紹介されておりますように、この記念品は国宝「<sup>かんじょうぼん</sup>灌頂幡」と世界遺産の富士山をモチーフにした、日本らしさを強く感じさせるデザインです。昨年春の完成後8ヶ月間で50名以上の正会員から配布についてのお問い合わせを頂き、国際会合の場において五庁、ASEAN、NIES、BRICs等世界各国の特許庁審査官に進呈されました。「TOKUGIKON」って何？ という会話をきっかけに、海外にも日本の特技懇の組織の存在を知って頂き、審査官同士のご縁をさらに深めるものになりましたら幸いです。

そして、ご縁を深めると言えば、昨年11月に開催しました特技懇懇親会は盛況のうちに無事終了いたしました。特技懇スタッフ一同より厚く御礼申し上げます。ご来臨された皆様には、初めてお会いする方との新しい出会いの場、あるいはご友人との旧交を温める機会になりましたでしょうか。その模様は、本号の特集記事をどうぞじっくりご覧ください。

震災からの復興を目指し変わり行く時代の中で、産声を上げた新しい技術やデザインを保護することで産業を大きく育て、より豊かな世の中を作るための力添えとなりたいという、出願書類を前にした審査官の心は昔も今もきっと同じです。

本年が皆様にとって素晴らしい年になりますよう、心よりお祈りいたします。